



イリアンジャヤ (インドネシア領ニューギニア)

裸族との生活体験記-その4

2日目は、トレッキング。川沿いの道をてくてくと、村々を訪ねて7kmほど歩きました。

ワメナは、川沿いに開けた細長い形の盆地で、上流は平らな部分が少なく、急な斜面や崖がほとんど。川沿いに、車が通れるぐらいの幅に道路が一応整備されているのですが、日本では考えられないような悪路です。人々の住む村は、この道路沿いではなく、適当なところで車を降りて歩いて行かなくてはなりません。

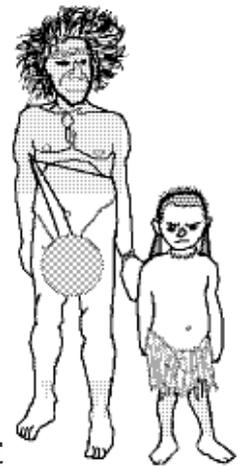
途中、裸の親子に会いました。大抵の子供は、顔だけでは男の子か女の子か見分けがつけにくいのですが(大人の女性にも多い現象)、腰みのをしているので女の子だとわかります。写真を撮らせてもらって、お父さんには500Rp=約25円、女の子にはクッキーの小袋をあげました。女の子は、むしゃむしゃとクッキーを食べ、袋をぼろっと道に落としました。しまった、と思いました。文明と接する以前彼らが出すごみは、豚が食べ、鶏がついばみ、アリが巣に運び、バクテリアが分解して、やがて土に戻るものばかり。この袋が、土に戻ることはないごみだとは、彼らは認識していません。

裸の親子と釣り橋を渡って、結構急な坂をへいこらへいこら上っていくと、さつまいも畑があって、何軒か家があって、その先に学校がありました。みんな、服を着ていました。授業中の教室をちょっとのぞかせてもらいました。生徒の年齢は一定していないようで、人数もまちまち。どの教室の先生の机の上にも、花が数輪いけてあったのが妙に印象的でした。ガイドさんの話では、教員はダニ族の言葉を知らない人ばかりで、それが一番大きな壁になっているとか。

その小学生の一人、Silimoa君と会いました。川沿いの崖っぶちの細い一本道を一緒に、前後ろになりながら歩きました。クラスで一番できると自慢する彼。将来は、兵隊になりたいのだそうです。5年生ですが、年齢を聞いたら、少し考えてから「はっきり分からない・・・」との返事。私たちが歩いていく先に、家があり、よっていくことになりました。

行くと、スカートだけのおばあちゃんと服を着たおばさん二人が、さつまいも畑のお昼の準備中。たくさん積み重ねた草から、もうもうと湯気がでています。これがダニ族伝統の石蒸し料理。観光用のデモンストレーションではなく、普通の家庭での様子を見ることができたので、大感激。「できた、できた。」とおばさんが一番上の草をどけると・・・豚の姿蒸しが・・・大きな豚の下には、さつまいものつる、その下にさつまいもがごろごろ・・・せっかくですから、試食をさせてもらいました。一口目を口に入れるのにはすごい勇気が必要でした。味よりも、寄生虫とかが心配・・・でも、えいっ!調味料は、いっさいなし。豚は、豚肉の味でまずくはありません。お芋は、日本のものより甘くなく、びちゃっとした感じ。さつまいものつるは蒸されてべとべと状態。これは食べませんでした。だって、おばちゃん、さつき足でふんだんだもん。

次のページに続く。





イリアンジャヤ (インドネシア領ニューギニア)

裸族との生活体験記-その5

3日目は、あらかじめ連絡を取っておいた村で、Pig Festival とダンスの見学です。そこで、ダニ族の女性の伝統的スタイルと、石蒸し料理のやり方をじっくり見ることができました。

まず、女性の伝統的スタイル。

細い皮でできたひもを前後ろにたらししている、ちょっと変わった腰みの。両脇でたばねてある。どうして落ちないのか、不思議でならない位置にしばりつけてある。相当きつくしぼるようです。



おなかがぼっこりである女性が多い。いわゆる金魚腹。妊娠しているわけではないという。じゃあ・・・？

横から見るとこんなです。おしりがすっかり見えちゃうんです。いつも袋を頭に引っかけているのは、おしりをそれで隠すからかしら・・・？



このほか、結婚していない女性は、こんなスカートををはくことも多いのだそうです。これは、草の繊維を染めて、何重にも、のれん状にたらししたもの。子供は短めで、大きくなると膝丈ぐらいになるようです。

服装ではないけれども、指切りの風習もあったそうです。今の人は、やらないそうですが、おばあちゃん達の手は、本当に指が少なくてびっくり。ちょっと見ただけでは、手とは思えない形です。そんな手でも、器用に袋を編んだり、畑仕事をするのですから、もっとびっくりです。身内が死ぬと、指切りをするのだそうです。このおばあちゃんは、右手の指4本、左手の指2本を石斧で切り落としています。現代の日本に生まれてよかったと、つくづく思います。



次に、石蒸し料理を紹介しようと思いましたが、紙面が狭いので、**ダニ族男性のかぶりものシリーズ**でこの紙面はおわり。次のページに続く。

このヘアスタイルは、てっきり地毛と思いきや、実は違う。縄を豚の脂で固めて作ったまるっきりのかつら。まるっきりのおかっぱ頭。

鳥の毛ぼうぼうのかぶりもの。色は黒系。真っ白い大きな飾り羽と鼻につけた大きなピアスが、豚の脂とすすで作ったファンデーションで真っ黒な顔によく映えていました。



毛糸のキャップに、毛ぼうぼうスタイル。単なる毛糸のキャップを愛用している人も多かった。このおじちゃんの鼻と耳には、向こうの景色がのぞけるほどの大きな穴が・・・





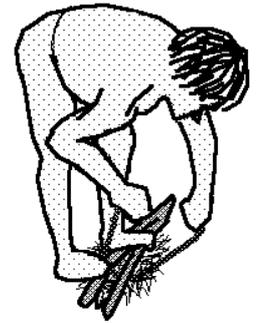
イリアンジャヤ (インドネシア領ニューギニア)

裸族との生活体験記-その6

さて、石蒸し料理のこと。

まず火をおこします。さいた薪に石を挟めて足で押さえます。それを、結構太めの竹ひごでしゅっしゅっしゅっしゅとこすります。その下に乾いた草っぱ。竹ひごが焼き切れると、下の草に小さな火種ができています。それを、ふうふうとするとぼぼぼと火が起こりました。この火で石を焼く大きなたき火と、豚の毛を処理する小さなたき火をおこします。

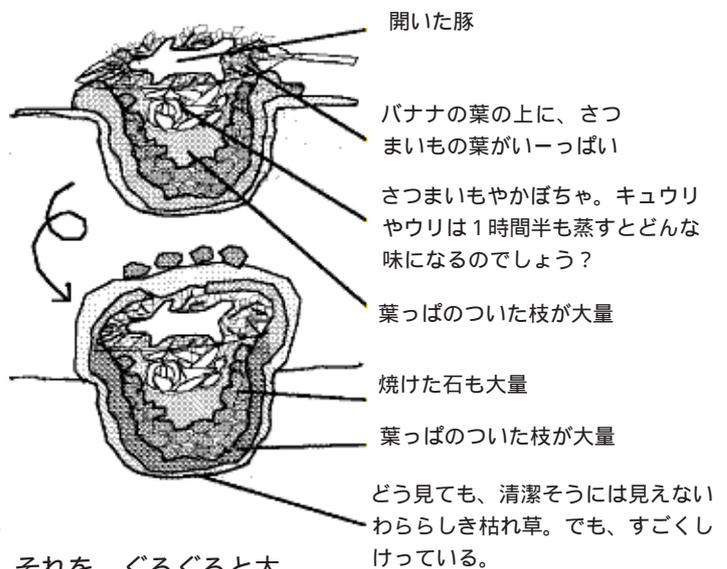
この日の豚は、子豚。さっと捕まえると、二人で手と足を持って、酋長がぷつんと弓で心臓めがけて矢を放ってご臨終。毛と表皮を焼いて削ると解体。皮や肉は竹のナイフで切って、肋骨や関節は石斧でたたき切って、平らになるよう解体します。解体は、男性の仕事のようでした。竹のナイフがすごく切れるのでびっくり。内蔵は、子供たちがどこかへ持ち去っていきました。



庭に落とし穴のような穴がいくつかあります。穴の深さは、大人の膝よりちょっと深いぐらい。穴の中と回りにたくさんわらが落ちています。水もたまっています。まさかこの穴で料理するとは思わなかったので、わらは何回も踏んでいたし、他の村人も放し飼いの豚も平気でその上を歩いていました。(私達とガイド以外は、皆裸足) その穴に、摘んで間もない葉を枝ごとに入れます。底の部分と壁の部分全部をおおいます。そこまですると、今度は、熱く焼けた石を、割いた丸太に挟んで穴に入れます。石で、底の部分と壁の部分全部をおおいます。次にまた、葉っぱのついた枝でおおいます。最初の葉っぱよりやや小振りの葉っぱでした。生の葉っぱなので湯気がぼわぼわ・・・やがてもうもうと出てきます。いよいよ、



食べ物を入れます。一番多いのがさつまいも。そのほか、かぼちゃが2、3個。キュウリやウリも置かれました。すでに、地面より高くなっています。バナナの葉っぱでふたをして、今度はさつまいもの葉っぱをたくさん。その上に、今解体されたばかりの子豚をどさっとのせて終了。湯気がすごく出ています。さっきまでみんながさんざん踏んで汚れたわらを、上手に持ち上げてすっぽり包みました。その姿は、まるで堆肥の山。それを、ぐるぐると太



いつたで結わえて、さらにまた焼けた石をのっけて、準備O.K. これを食べるのか・・・と思いつつ1時間半。女性陣が、わらをほどくと、熱々に蒸された豚やおいもが湯気の中から現れます。その回りにしゃがみ込んで、自分の足元のを食べ始めると言うわけ・・・ PDF版第3-3号に続く。